

2021年2月11日 第3回オープンミーティング報告

2021年2月11日、オンラインで運営委員会をした後、公開のオンライン・ミーティングを開催しました。

公開ミーティングのテーマは

「小学校でのP4C～対話後のふりかえりによる、思考の深まり・道徳性の涵養について」

報告者 有賀慎平（兵庫県小学校教員）

司会 城野知佐（大阪教育大学附属平野小学校教員）

時間 午後3時～午後4時30分

参加者は基調報告者と司会以外は、運営委員4名、一般の参加5名、の計11名（他に参加予定者は4名いましたが、都合で参加せず）

概要

① 道徳とP4C

・特別教科道徳の目標と、P4Cでの道徳について

② 児童アンケートより

・今年度の道徳（P4C）のふりかえり

③ 児童のふりかえり奇術より

・P4Cジャーナルの実際

④ 今後の課題

・P4Cでの道徳を核として

道徳を実践するのはP4Cが一番ではないかと感じ始めた

授業で毎回留意していること：

- ・〈今回の問い・次回の問い・友だちの意見〉などに対する自分の考えを述べるようにする。
- ・〈話し方・聞き方・深め方・受け止め・リアクション〉など、対話についてのふりかえりや、次回の目標を説明する

授業で毎回注意していること

- ・友だちの名前を書けるようにする
- ・理由をしっかりと書く
- ・自分の意見を書く

Q&A

Q1: 年間を通して、7-8年前から、児童がどう変わって、よかった点は？

A: 2年前から、振り返りの質が上がっている。楽しいという結果だけであったが、「深まっていく」「いっぱい書ける」という振り返りが多くなってきている。人の意見を受け止めるということを使い続けて、子どもたちは落ち着いてきている。

Q2: 道徳でP4Cをするのがつらく感じるときがある 道徳でP4Cのどこが楽しく面白かったか？

A: 道徳への後押しがP4Cでは有効と考える。P4Cは道徳教育の要ではないか。テキストを読んでやることの違いが実感される。

Q2: 道徳がつらく感じるのは、やり方のせいかな。価値項目をやらなければいけない、そこに縛られてしまった。総合で自由にやった方がいいかも。道徳的な内容になったら、道徳にする、という対応をした。

A: 価値項目の取り扱いについては今日お見せした資料を参考にしてください。自分なりのやり方ですが。

Q3: 学校ではあまり普及していないのを、どういうふうを導入していったらいいのか。円になってやる。机がない、書くものがないということで戸惑っている。

A: 導入としては、特にP4Cを意識しないで、一人ひとりハマっていることを紹介してもらい、他の人がそれに質問するという形で、やってみる。

P4Cのルールを説明。聞くことの大切さ。ボールを持った人だけが話すことができる。先生も先生でなくなるよ、と伝えて、円に入っていく。みんなと同じ一員として自分の意見を述べたりする。みんなのことを知ろうとする活動であることを理解してもらう。

学校でP4C 輪になって話すことのよさを感じる子が多い

職場的には新しいことをすることに理解があった

回り、職場の理解を得る必要はある

他の教師から、実際にP4Cを経験している子の雰囲気が違うと言われている

他の教師も、どういう反応が子どもたちにあるのかに興味をもっている

外部の人が来てやることの方がやりやすい面があるかも。その場合、知的安全性・平等という感覚が大切。

Q3: 子どもたちから問いが出てくるのか、出ない場合はどうするか

A: 問いを出すことはやはり難しく、そのやり方を子どもがまだ分からないかもしれないので、問い作りの練習をする。例えば、ペアを組んで、5W1Hを使って、問いを掛け合う練習をする。この積み重ねの中から、問いの出し方が分かっていく。

話すこと、聞くことも積み重ねが大事

視線を怖がる子がいるが、ボールがあると、そこに視線が向くので、緊張がほぐれる
対話の場がないと、こういう子かということで、思い込みが重なる

Q4： 問いを決めるのは多数決か。なぜ多数決かという問いを出す生徒が出た。

A： 問いを絞っていくやり方もある

最初の問いはきっかけに過ぎず、それから深めていって問いが変わっていく
スケジュールを決めて、出てきた問いを順番に扱う

自分のやりたい問いを他の人に説得して、その問いを選んだこともあった

Q5： 興味のない先生が渋々入ってくる場合がある。上から目線での話をする先生がいる。
垣根を取り払う方法はあるだろうか。

A： 子どもの変容を見てもらうのがいいのではないか。興味のない先生でも、自分のことを話し始めると、一変することがある。

Q6： 振り返りの共有はしているのか

A： している。教師のコメントをつけて、共有することで、他の児童も書き方が分かっていく。

以上
文責 梶形